

カワバタモロコの飼育方法・繁殖方法

2020 大阪府立枚方高等学校 生物飼育部

★概要

ため池など止水に生息するコイ科の淡水魚(日本固有種)。体長は成魚でも5cmほどであり、ブラックバスなどの影響を非常に受けやすい。そのため2019年11月現在、環境省レッドリストにおいて絶滅危惧種 I B類、大阪府において I 類に指定されている希少種である。都道府県によっては天然記念物に指定されていたり、条例で採集が禁止されていたりする場所もある。寿命は、飼育下では5年ほど。

大阪では4月ごろから産卵期に入り、雄の体色は少し緑がかった金色になり非常に雅。水草や枯れ葉に直径1mm ほどのごく小さな卵を産む。24時間ほどで孵化し、孵化個体も極小である。これは日本産コイ科魚類の中で最も小さい(細谷 1987)。孵化直後はワムシやゾウリムシなどのプランクトン食性で、成長と共に小さな虫や水草を食べる雑食になる。

2020年2月に、「種の保存法」特定第二種国内希少野生動植物種に指定され、販売目的での採集が禁止になった。

★飼育方法

①準備物

水槽・エアポンプまたはろ過器・魚のえさ(冷凍アカムシなど)・水草

②エサについて

雑食で食いつきもよく、採集個体でも早い段階から何でも食べる。魚類飼育で一般的な冷凍アカムシや人工飼料で十分。植物食性が強めなので、水草をいれておくとそれも食べる。魚類飼育経験者であれば、飼育自体の難易度は低い。

③温度管理

止水に生息しているので高温にも低温にも強い。枚方では年間、水槽用ヒーターおよびクーラー無しで飼育可(室内飼いまたは、外の直射日光のあたらないところ)。

ただし他の淡水魚同様、ヒーター無しでは冬場のエサの食いつきが悪い。

★繁殖方法

冬:低温条件や気圧の変化が産卵を促すのか、冬に水槽用ヒーターを入れて水温を上げた年には産卵が確認できなかった。よって冬の低温をしっかりと経験させる。

3月:親の入っている水槽(45cm以上)に水草をできるだけ多く投入する。エアレーションやろ過器も外し、「止水」状態にして孵化した際の仔魚への負担を減らす。

現在産卵を確認できた水草は『マツモ』『ウィローモス(市販)』『ホテイアオイ(市販)』『オオカナダモ』。自然下では落ち葉にも産卵するようである(出典 wikipedia)。

4月:水草に産卵が確認できたら、親による共食いを防ぐために親を別水槽に移す。卵は24時間ほどで孵化するため、毎日確認し、仔魚が孵化していないかも確認する。孵化直後の稚魚は3~4mm ほどでほぼ透明であり、泳がずに壁にへばりついていることが多いため発見しづらい。
このあとの水槽は仔魚への負担を考えて、体長が1.5cmほどを超えるまでは水替えを行わない。
(2020年度は6月に産卵を確認した。)

孵化後3~4日(体長4mm程):壁についていた仔魚が泳ぎだす。エサは冷凍のワムシを水で溶いたものや、あれば培養したゾウリムシなどを与える。このあたりでは気をつけていても死んでしまう個体が見られる。野外に置いた水槽では生存率が高いので、室内飼育ではエサの供給量に限界があるのかもしれない。

孵化後30日(体長8~10mm程):口も大きくなり、沈降性の稚魚用人工飼料を食べるようになる。このあたりまで成長できた個体はあまり死ななくなる。

孵化後50日(体長15mm程):親を同じ水槽に戻しても大丈夫になる。エサも親と同様。性成熟は十分な栄養下では1年。

★参考写真(全て枚方高校生物飼育部で撮影)



↑親個体飼育の様子(60cm水槽)



↑産卵前の婚姻色



↑カワバタモロコの卵(1mm程)



↑孵化後数時間の仔魚